

## 第11回「大学体育スポーツ研究フォーラム」一般発表報告

●発表抄録

### ライフスキル獲得による体育実技授業受講生の類型化とその特徴

陳 昱龍, 前田 奎, 成相美紀, 梶田和宏, 吉中康子

京都先端科学大学健康医療学部

**【背景と目的】**本研究は、京都先端科学大学の「Sports Life Skills: SLS」科目の受講生のライフスキル（以下はLSと略す）獲得の類型化とその特徴について把握することを目的とする。**【方法】**2022年8月に同科目のパドミントンとニュースポーツを受講した大学生164名（その内有効回答：104名、M：80名、F：24名）を対象としたアンケート調査（①大学生の属性②LSを測る尺度が構成されている）を実施し、統計分析を行った。**【結果と考察】**まずは性別によるLS獲得レベルの比較において性別間に有意差が認められなかった。その背景にあるのは、コロナ感染拡大防止のため、2022年度もオンデマンドと対面授業が交互に行われるようになってきている。SLSでは対面時のクラスの人数が少ない場合、より担当教員の周到な指導の影響が高くなるものと推測され、全ての受講生に丁寧な配慮や即時的なフォローなどが行われたりすることで、今回の結果に繋がったのではないかと考えられる。次にSLSを受講する大学生はLS獲得の特徴をもとにそれぞれ3つずつのタイプに分類された。すなわち、1年生は「①利他タイプ」、「②自信ロスタイプ」、「③前進タイプ」で、2年生は「①消極タイプ」、「②一様タイプ」、「③前進タイプ」であった。また、1年生における「①利他タイプ」と「③前進タイプ」によって構成されている受講生の割合は、全体の82.5%で、2年生における「②一様タイプ」と「③前進タイプ」によって構成されている受講生は、68.3%を占めており、それぞれにLS獲得のレベルが高い傾向にあった。SLSを通して、自分自身のもつLSをアップデートし、今後の勉強生活においても、各種スキルを発揮し日常生活の中で生じる様々な問題や要求にうまく適応できる可能性を秘めていることが推察される。**【結論】**今後のSLS授業展開について、「1年生と2年生のLS獲得の特徴が異なる」ということを理解したうえで、複合的かつ総合的なアプローチを模索していくことが必要だろう。

キーワード：大学体育、大学生、「日常生活スキル尺度」（大学生版）

●発表抄録

### 対面授業再開後における活動実態と生活習慣に関する調査

藤田恵理<sup>1</sup>, 田村達也<sup>2</sup>, 高橋 将<sup>3</sup>, 鈴木 明<sup>3</sup>, 山本実友菜<sup>2</sup>, 小出高義<sup>3</sup>, 平工志穂<sup>1</sup>

<sup>1</sup>東京女子大学, <sup>2</sup>青山学院大学, <sup>3</sup>大東文化大学

**【背景と目的】**新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は外出自粛など、人々の行動を制約した。これらの影響は授業のオンライン化など大学にも影響を及ぼし、2021年度（21年度）まで続いた。一方、2022年度（22年度）になってからは緊急事態宣言やまん延防止等重点措置は発令されず、COVID-19対策と両立する教育活動を目指し、原則対面授業を実施する大学が増えてきている。そのため、22年度に入学した新入生の活動実態と生活習慣は異なる可能性が高い。そこで本研究では、22年度の大学新入生を対象に、対面授業再開後の活動に関する実態や生活習慣を把握するために、21年度と22年度の大学新入生の歩数、外出時間、運動時間などの活動に関する実態や生活習慣（睡眠時間など）を21年度の大学新入生と比較し、活動に関する実態や生活習慣に違いがみられるかを明らかにすることを目的とした。**【方法】**21年度と22年度の大学新入生それぞれ195名、153名を対象とした。対象者は入学後5～6月にWebアンケート調査を行った。アンケート調査内容は、登校の回数、歩数、外出時間、運動時間、睡眠時間、携帯利用時間、起床時体温、就寝時体温、睡眠の質、体調、ストレス、起床時刻、就寝時刻であった。**【結果と考察】**登校の回数、歩数、外出時間、運動時間は21年度と比較して、22年度は有意に多かった。睡眠時間、携帯利用時間は21年度と比較して、22年度は有意に少なかった。起床時刻（午前7時まで）は21年度と比較して、22年度は有意に多かった。体調とストレスは21年度と比較して、22年度は不良であった。また、ほとんどの調査項目において平日に大きな違いが見られたことから、対面授業再開は平日の活動実態や生活習慣に影響を与えていたと考えられる。**【結論】**22年度（対面授業再開後）の活動実態と生活習慣は、21年度と異なっていた。

キーワード：大学新入生、COVID-19、アンケート調査

●発表抄録

## コロナ禍における体育（ダンス）授業の展開と検討：

事例からみる実技として成り立たせるための工夫

飯田路佳<sup>1</sup>, 田中安理<sup>2</sup>, 多田五月<sup>3</sup>, 川上美里<sup>3</sup>, 清水文子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>十文字学園女子大学, <sup>2</sup>常葉大学, <sup>3</sup>帝京大学

**【背景と目的】**2020年度前期よりコロナ禍における大学体育の授業展開は各大学でも混迷を極めた。3年経た現在それらを振り返りどのように切り抜けたかについて、A, B, C, Dの4大学における2020年度、2021年度の授業展開を各担当者により振り返り検討することを目的とした。**【方法】**各担当者が行った授業形式や内容、授業の成果物およびリアクションペーパーを持ち寄り、研究者のトライアンギュレーションの手法を参考に用いて検討した。**【結果】**1)開催期ごとの開催方法について 2)実技として成り立たせる工夫 3)グループワークを成り立たせるために駆使したネットワーク環境 4)学生の反応という主に4つの視点から分析を行った。その結果、2020年度は前後期ともオンラインを駆使して対応していた。その内容としては双方向の遠隔授業が可能な大学とオンデマンドで対応している大学とに別れた。主にオンデマンドで対応していた大学は、翌年対面授業に切り替えるタイミングが早く、また15コマのうちの対面授業数も多いことがわかった。また、双方向の遠隔授業が可能な大学では、その環境の中でもグループワークを成立させるための工夫がみられていた。例として、Zoomのブレイクアウトセッションを利用しながら、Microsoft OneDriveに保存しているPPTの作業を並行で行うことや、Google Jamboardを利用することなどがみられた。オンデマンドでは、PDFで課題を与えらるとともにYouTubeを利用して動画を配信することで実技として成立させる等、各大学の環境により、工夫は異なっていた。**【結論】**授業の方法としては、対面が不可能だった際にも実技として成り立たせるための様々な工夫をしていることがわかった。今回コロナ禍に使用した技術を、今後に向けてより効果的な授業方法を開発する余地があるのではないかと可能性がみえてきた。

**キーワード：**授業方法, 対面, 遠隔, 動画配信, 身体表現

●発表抄録

## 必修体育科目におけるハイブリッド授業の全学的展開

川邊保孝<sup>1</sup>, 吉原さちえ<sup>1</sup>, 植村隆志<sup>1</sup>, 八百則和<sup>1</sup>, 小山孟志<sup>2</sup>, 與名本稔<sup>2</sup>, 小河原慶太<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東海大学スポーツプロモーションセンター, <sup>2</sup>東海大学体育学部

**【背景と目的】**東海大学では、約28,500名に及ぶ全学生が履修する必修科目として健康スポーツ科目が開講されている。健康スポーツ科目は、「健康・フィットネス理論実習」と「生涯スポーツ理論実習」という2科目から構成されており、健康と体育・スポーツ活動の意義を学び、将来の人生をより豊かにできるようなライフスタイルを身に付けることを目的とする。また、初年次教育として“友達づくり”や“仲間との信頼関係づくり”の機能を重視している。本発表では、大規模な必修体育科目におけるコロナ禍を契機とした遠隔授業導入と対面授業再開によるハイブリッド授業の確立までの実践について報告する。**【結果】**2020年度前期は新型コロナウイルス感染症により全ての授業を遠隔授業で実施しなければならなかったが、同年後期からは、学生間の交流という目的の一つを達成するため、感染症対策を徹底したうえで全14回のうち3回を対面授業による体育実技として再開させた。2021年度後期からは体育実技を6回に増やし、遠隔授業による講義と合わせたハイブリッド授業として展開している。講義については動画資料ならびに教科書を用いたオンデマンド形式の遠隔授業となっており、専用ホームページを独自に開設して学生への配信を集約している。なお、動画資料の作成は、東海大学体育学部やスポーツプロモーションセンターのみならず全国のキャンパスの体育・スポーツ・健康分野の教員がその専門性を活かして担当している。体育実技については、更衣することなく実践できることを一つのコンセプトとしており、生涯スポーツ理論実習では、ロゲイニング、ポッチャ、グラウンドゴルフを採用している。今後は、授業効果ならびに学生の授業評価の測定とそれをもとにした授業改善が課題であり、ポストコロナにおける必修体育科目のあり方について検討・実践を進めたい。

**キーワード：**授業改善, ポストコロナ, DX

●発表抄録

## 芸術大学の特性をふまえた健康教育の実践

岸本栄嗣

京都芸術大学芸術教養センター

**【背景と目的】** 芸術大学での学生の制作・研究は、拘束姿勢や大量のVDT作業など、身体的に負荷のかかる活動が少なくない。放置すればさまざまな不調につながる事が予想される。制作・研究もさることながら、日常生活や卒業後の心身の健康状態にも影響を及ぼしかねない。こうした問題は従来、労働衛生分野で取り上げられてきたが、とくにそうした作業や活動と密接な芸術大学教育現場においては看過すべきではないだろう。そうした問題意識のもと、学生の普段の制作・研究・学習時の姿勢・動作を見つめ直し、セルフケアを促すことを意図した授業を試みたので報告する。**【結果と考察】** 筆者の担当科目（教養科目）である「現代ヘルスケア論」（講義／オンライン）では、課題の一つとして、受講生の普段の制作・研究・学習時の姿勢・動作を撮影（写真）し、それをもとに報告をまとめることを求めた。それらのうち筆者が選択したものを教材として授業内で使用し、解説や助言を行った。シラバスで示した授業内容「ストレッチ」、「（筋力）トレーニング」、「メンタルヘルス」などについては、受講生の報告内容（＝学生の日常）と関連付けて指導した。授業後のアンケートでは、「ストレッチに関する知識」、「ストレッチの実践」、「姿勢に関する知識」への評価が高かった。また、本科目受講後、受講生の運動に対する意識、行動（運動機会）がともに向上する傾向にあったことが明らかになった。この意識と行動の変容は、普段の制作・研究・学習時の姿勢・動作を自ら客観視し、そこに実行可能な知識や方法を関係づけたことで促されたのではないかと考察された。

**キーワード：**芸術, 健康, 教養教育

●発表抄録

## 足元から見直す大学生の健康づくり, 動きづくり：

接地足蹠形態および歩容の特徴と, 改善に向けた草履サンダル導入の事例報告

宮口和義<sup>1</sup>, 畝本紗斗子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>石川県立大学教養教育センター, <sup>2</sup>金沢工業大学基礎教育部

**【背景と目的】** 立位時に足趾が接地していない“浮き趾”が増加している。浮き趾は足趾把持力の低下や重心前方移動能力の低下などの機能不全を引き起こすとされ、改善すべき身体現象といわれている。しかし、その歩容に及ぼす影響について論じている報告は少なく、対処法も十分明らかにされていない。本発表では大学生を対象にした足圧分布測定および歩容解析の結果を示すとともに、草履サンダルを用いた日常での導入効果について紹介する。**【方法】** 一般学生140名および女子学生アスリート（サッカー、陸上競技）60名を対象に「フットビュークリニク（ニッタ社製）」を用いて足圧分布測定を行うとともに、歩容解析デバイス「AYUMI EYE（早稲田エルダリーヘルス事業団）」による測定を行った。また、歩容得点の低かった一般学生の一部と女子アスリート学生にオリジナルで開発した草履サンダル「武王（ラッキーベル社）」を渡し、日常生活で活用してもらった。このサンダルは立位時および歩行時に、必然的に前足部に荷重しやすい形状となっている。3ヵ月後に再測定を行った。**【結果と考察】** 一般学生の接地足蹠形態をみると、浮き趾傾向の者が全体の8割を占めており、約4割の者は足趾の僅か一部しか接地していなかった。また、前足部に対する踵部の足幅は57%以下が望ましいとされているが、基準に達しているのは10.7%であり、細長い足蹠の者が多かった。歩容結果については、アスリートも含め推進力得点（前に進む力を表す）の低い学生が多かった。草履サンダル導入3ヵ月後に再測定を行った結果、浮き趾の改善傾向が認められ、足圧中心も前方に変位していた。歩容については歩幅が伸び、歩行速度も上がり結果的に推進力得点も高くなっていた。**【結論】** 草履サンダルを履くことで足趾が使えるようになり、駆動力を効率良く床面に伝達できるようになったと思われる。

**キーワード：**浮き趾, 歩幅, 推進力, 履物

●発表抄録

## インクルーシブな視点を取り入れた大学スポーツ授業の試み：

コロナ禍における学生のキャンパスライフに着目して

吉原さちえ<sup>1</sup>，川邊保孝<sup>1</sup>，植村隆志<sup>2</sup>

<sup>1</sup>東海大学スポーツプロモーションセンター，<sup>2</sup>東海大学体育学部

**【背景と目的】** 2021年に開催された東京2020大会ビジョンでは、3つの基本コンセプトの中で「一人ひとりが互いを認め合い（多様性と調和）」を掲げていた。大会を通して「文化」「性」「世代・ライフステージ」「心身機能」これら4つの違いを知り示すことは、大会以降も日本社会に暮らす誰もが豊かな生活を送れるようになることを期待していたのではないかと。2020年1月以降国内外に感染拡大した新型コロナウイルスは、学生が期待していたキャンパスライフを一転させた。そこで東海大学ではインクルーシブ（包括的）な視点を取り入れ大学におけるスポーツ授業を積極的に展開することは、コロナ禍ではあるものの、学生生活の一助となるのではないかと考えた。本研究では、大学でのインクルーシブな視点を取り入れたスポーツ授業の機会を通して、学生生活の中でコミュニケーション場面への影響を明らかにすることを目的とした。**【方法】** 東海大学では全学生を対象としたスポーツ授業を展開している。そのうち「生涯スポーツ理論実習（グラウンド・ゴルフとロゲイニング）」の受講学生（一部）による授業感想から、インクルーシブな授業が学生に与える影響を紐解くこととする。**【結果】** 1）両授業では、授業を通じてスポーツの印象や捉え方がこれまでと異なり、スポーツの広がりを感じていることが明らかとなった。2）コロナ禍で学生同士コミュニケーションを図る機会が限られる中、両授業がコミュニケーションのきっかけに繋がることが明らかとなった。3）インクルーシブなスポーツ授業は、学生のキャンパスライフの一助となることが明らかとなった。**【結論】** これら3つの結果から、インクルーシブなスポーツ授業を展開することは、学生にとって人生の新たなコミュニケーションを生み出す学生生活の中で、コロナ禍に限らず非常に重要な役割を果たしていたのではないだろうか。つまり大学におけるスポーツ授業は、キャンパスライフの一役を担うと考えることができる。

**キーワード：** 大学生，生涯スポーツ，インクルーシブ（包括的），スポーツ授業

●発表抄録

## 大学一般体育で育成される対処資源の効果

阪田俊輔<sup>1</sup>，杉山佳生<sup>2</sup>

<sup>1</sup>横浜商科大学商学部，<sup>2</sup>九州大学大学院人間環境学研究院

**【目的】** 対処資源とはコーピングに先行して対処方略の選定，対処努力の維持，対処方略の効果に影響を及ぼす要因（Lazarus & Folkman, 1984）であり，ストレス場面のみで活用されるものではなく，個人が持つ汎用的な資源である。体力，自尊感情，情報活用能力，ソーシャルキャピタルが定義され，他者との交流や競技力向上の工夫が必要となる大学一般体育に影響を受ける（阪田ほか，2022）。本研究では，①大学一般体育で教育された対処資源が，ストレス対処の効果にどう影響するか，また②授業で発揮されるストレス対処スキルの授業外への般化にどのように影響するのかを検討した。**【方法】** 大学一般体育を受講した学生155名を対象に質問紙調査を実施した。測定内容は対処資源（4因子各5項目），授業内でのストレス対処（問題焦点型，情動焦点型：各3項目），授業外でのストレス対処（問題焦点型，情動焦点型：各3項目），授業でのストレス反応（ポジティブ・ネガティブな感情：各4項目）であった。**【結果】** ①を検討するため，対処資源及びストレス対処を独立変数，ストレス反応を従属変数とする二元配置分散分析を実施した。その結果，ポジティブな感情に対する対処資源と問題焦点型対処の主効果（ $F(1,151) = 7.44, p < .01; F(1,151) = 6.67, p < .01$ ）が確認された。次に②を検討するため，授業でのストレス対処を独立変数，対処資源を媒介変数，授業外でのストレス対処を従属変数とした共分散構造分析を実施した。その結果，対処資源が，ストレス対処の般化について部分媒介することが確認された（直接効果  $\beta = .48 \rightarrow .23$ ，媒介効果  $\beta = .27$ ）。**【考察】** 本研究の結果から，対処資源を多く持つ学生ほど問題焦点型対処に成功し，また授業で発揮されるストレス対処スキルを授業外へ般化できていることが確認された。本研究の結果から，大学一般体育は大学生のストレス対処スキル向上に寄与する可能性が示された。

**キーワード：** ストレスコーピング，問題焦点型コーピング，心理社会的スキル

●発表抄録

## 学生主体の協同型学習は、運動パフォーマンスを向上させるか

佐藤 和

千葉工業大学創造工学部

**【背景と目的】**近年の大学教養体育は、スポーツ活動を教材とし、科学的視点や課題設定・解決能力の獲得などを重視する考えが普及してきた。また、経済産業省は、職場や地域社会での多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として「社会人基礎力」を提唱し、大学教育にもその要請が高まっている。このような背景から、近年、大学体育授業にはチーム基盤型学習や問題解決能力養成型学習といった協同型学習が積極的に取り入れられ、教養体育受講後の社会人基礎力向上を報告している。一方で、スポーツ活動の根底のひとつには、運動技能の習得が必要であるとの考えも存在するが、学生主体の協同型学習によって運動パフォーマンスが向上するか否かについて疑問が残る。そこで本研究は、協同型学習形態によって運動パフォーマンスが向上するか否かについて調査することを目的とした。**【方法】**C大学の教養体育授業であるスポーツ科学（ソフトボール）受講生（50名）を対象に、協同型学習の教育効果指標として社会人基礎力を、運動パフォーマンスの指標には投球パフォーマンス（投球速度と回転数）を採用し、受講前後で比較、検討した。**【結果と考察】**教育効果指標である社会人基礎力は、社会人基礎力得点、3能力（アクション、シンキング、チームワーク）得点、発信力およびストレスコントロール力を除く10能力要素得点においてポスト調査得点がプレ調査得点にくらべて有意に高値を示した。また、運動パフォーマンスの指標である投球速度および回転数もポスト測定値がプレ測定値にくらべて有意に高値を示した。これらの結果より、学生主体の協同型学習形態授業は、社会人基礎力のみならず運動パフォーマンスの向上も期待できることが示唆された。

**キーワード：**社会人基礎力、投球パフォーマンス、球速、回転数

●発表抄録

## 運動部活動の継続性とポジティブな徳性の関係：

日本版生き方の原則調査票を用いた検討

霜鳥駿太<sup>1,2</sup>、木内敦詞<sup>3</sup>、西田順一<sup>4</sup>、中雄勇人<sup>5</sup>

<sup>1</sup>帝京大学冲永総合研究所、<sup>2</sup>筑波大学大学院、<sup>3</sup>筑波大学体育系、<sup>4</sup>近畿大学経営学部、<sup>5</sup>群馬大学共同教育学部

**【背景と目的】**ポジティブ心理学の主要テーマのひとつに、ポジティブな徳性がある。ポジティブな徳性は、24の強み・長所を6つの美德に整理した概念である。その育成に大学体育授業が関係していることが示唆されている（橋本ほか、2020）が、運動部活動経験との関係は明らかではない。そこで本研究では、運動部活動の継続性とポジティブな徳性との関係を検討することを目的とした。**【方法】**関東の国立大学、公立大学、各1校の一般体育受講生828名を対象に、日本版生き方の原則調査票（大竹ほか、2005）および部活動の継続性と一貫性を尋ねる質問紙調査を実施した。また、同大学の一般体育受講生80名を対象に、Big Five 短縮版尺度（TIPI-J：小塩ほか、2012）を用いて調査を実施し、信頼性と妥当性の検証として $\alpha$ 係数の算出（内的整合性）と再テスト信頼性（3週間）、確認的因子分析（構成概念妥当性）、併存的妥当性の解析をした。**【結果】**主な結果は以下の5点であった。①信頼性については、内的整合性（ $\alpha = .58-.78$ ）、再テスト信頼性（ $r = .52-.81$ ）であり、許容範囲内の信頼性が確認された。②妥当性については、確認的因子分析の結果はGFI = .829, CFI = .776, AGFI = .806, RMSEA = .054, 類似尺度「TIPI-J」との有意な相関があり、一定の妥当性が確認された。③ポジティブな徳性は極低群、低群、中群、高群に類型化され、残差分析の結果、中学校のみ運動部の者は「低群」に多く、「中群」に少なかった。④ポジティブな徳性には性差があり、「勇気」「人間性」「超越性」の得点は男性より女性が高かった。⑤複数のポジティブな徳性で、異種目継続型より同一種目継続型の得点が高かった。**【結論】**本研究にて、日本版生き方の原則調査票の信頼性と妥当性を確認し、同一種目を継続することとポジティブな徳性の関係が示唆された。

**キーワード：**the Values in Action Inventory of Strengths (VIA-IS), positive psychology, 大学生

●発表抄録

## 大学体育館における暑さ指数の評価とその安定性

熱中症予防情報サイトとの比較を通して

高橋和文<sup>1</sup>, 稲嶋修一郎<sup>2</sup>

<sup>1</sup>金城学院大学, <sup>2</sup>愛知県立大学

**【背景と目的】** 熱中症予防のためには、運動やスポーツを実施する場所の気温や暑さ指数をより正確に知る必要がある。暑さ指数は、Wet Bulb Globe Temperature (以下、WBGT) として、環境省の熱中症予防情報サイトから、日本各地の実測値や実況推定値が提供されている。本研究の目的は、複数年にわたる大学体育館 WBGT の独自の観測データと熱中症予防情報サイトの WBGT データの比較を通して、大学体育館内の WBGT を評価し、その安定性を検証することである。**【方法】** 大学体育館における WBGT は、愛知県内にある公立大学の体育館において、床面から1.5mの高さに設置した WBGT 計により観測した。観測は、2021年5月22日から10月8日と、2022年5月15日から10月12日までの複数年の期間で、5分毎にデータを観測し、分析には毎正時のデータを用いた。比較対象とした WBGT は、熱中症予防情報サイトで名古屋市の屋外観測データとして提供される、上の期間と同刻の毎正時のデータとした。分析には、同刻のデータを用いて、公立大学体育館の WBGT から名古屋市の WBGT を差し引いた差分データを用いた。分析は、python3.7.9を用いて実施した。**【結果と考察】** 差分データは、周期性を有しており、体育館の温熱性能を捉えていた。各時間帯別の WBGT 差分の平均値は、2021年と2022年で極めて似通った数値を示した。つまり、本研究で提案した評価手法は、安定性を有しているので、補正值としても活用できる。この補正值は、環境省の WBGT とあわせて活用することで、より正確に体育館内の WBGT を把握し、大学体育や部活動の場面での熱中症予防に取り組むことを可能とする。**【結論】** 時間帯別の WBGT 差分データの平均値は、複数年で時間帯ごとに安定した数値を示した。このことから本研究で提案する評価手法の活用は、高い精度で大学体育館の WBGT を推計することを可能とする。

**キーワード:** WBGT, 熱中症予防, 温熱性能, 補正值

●発表抄録

## 剣道の授業における「学びの深化」を促す授業実践の研究

高瀬武志

桐蔭横浜大学法文学部

**【目的】** 大学生の体育実技科目である剣道の授業において剣道未経験である学習者が「アクティブラーニング」を取り入れた授業の中で「学びの深化」を促すためには、どのような要因が挙げられるかを明確にすることを本研究の目的とした。**【方法】** 剣道の授業を開講する A 大学（スポーツ健康政策学部・33名）と B 大学（教育学部・28名）の授業履修者を対象とする。アクティブラーニング型授業を実践しつつ毎回の授業の中で剣道の所作・技術の解説や指導に加えて所作・技術の土台としてある「武士道」の伝統を積極的に解説と指導を施した A 大学とそうでない B 大学の学習者の「学びの深化」を比較する。学習者の作成した自身の学びについて振り返るレポートの記述とレポートの記述を通して「学びの深化」を得られている学習者にインタビュー調査を実施し、「学びの深化」を促した要因は何であったかを質的研究の手法で探る。**【結果及び結論】** 剣道未経験者を主な対象とする剣道の授業の中で、学習課題である所作や技術の解説と指導の重要性は当然である。しかし、それだけでは所作や技術の理解や習得については一定の到達度は得られるが学習者の「学びの深化」は乏しい。所作や技術の解説と指導の際に積極的に「武士道」の伝統と絡めて解説や指導を施すことによって学習者の得る学びの中に学習課題である所作や技術の習得に加えて、文化性や精神性についても考察が及んでいることから「学びの深化」は豊富なものになっていることが明らかであった。ここに「学びの深化」を促す一因があると考えられる。**【注】** 本研究は2022年度潮田記念基金による慶應義塾博士課程学生研究支援プログラムの研究補助を受けて実施しています。

**キーワード:** 武士道, アクティブラーニング, 個の学習, 協働学習, 質的研究

●発表抄録

## 大学体育授業における批判的思考態度と主観的恩恵評価の関係

鳥井淳貴<sup>1</sup>, 中須賀巧<sup>2</sup>

<sup>1</sup>宝塚医療大学保健医療学部, <sup>2</sup>兵庫教育大学大学院学校教育研究科

**【目的】**本研究は、大学体育授業における批判的思考態度と主観的恩恵評価の関係を明らかにすることを目的とした。**【方法】**体育授業を履修した大学1年生137名(男子53名,女子84名)を対象に、批判的思考態度尺度および主観的恩恵評価尺度を使用した。調査1回目の批判的思考態度(以下、批判1〇〇)の下位尺度を独立変数、主観的恩恵評価の下位尺度を媒介変数、2回目の批判的思考態度(以下、批判2〇〇)の下位尺度を従属変数とする共分散構造分析を実施した。**【結果】**まず、モデルのデータへの適合度は全ての指標において基準を満たす値が得られた(GFI=.956, AGFI=.903, CFI=.999, RMSEA=.014)。次に、有意なパス係数について述べる。批判1客観性は、批判2客観性( $\beta=.32$ )に正のパス、批判2探究心( $\beta=-.24$ )に負のパスを示した。批判1証拠の重視は、批判2証拠の重視( $\beta=.42$ )と批判2探究心( $\beta=.22$ )に正のパスを示した。批判1探究心は、運動スキル( $\beta=.37$ )、ストレス対処( $\beta=.34$ )、批判2客観性( $\beta=.20$ )、批判2探究心( $\beta=.65$ )に正のパスを示した。また、協同プレー( $\beta=.30$ )を介して批判2探究心( $\beta=.15$ )に正のパス、批判2論理的思考への自覚( $\beta=-.10$ )に負のパス、体力・身体活動( $\beta=.38$ )を介して批判2論理的思考への自覚( $\beta=.12$ )に正のパスを示した。批判1論理的思考への自覚は、運動スキル( $\beta=.30$ )、規則的な生活( $\beta=.25$ )、批判2論理的思考への自覚( $\beta=.47$ )に正のパスを示し、体力・身体活動( $\beta=.38$ )を介して批判2論理的思考への自覚( $\beta=.12$ )に正のパスを示した。なお、決定係数は、運動スキル( $R^2=.10$ )、規則的な生活( $R^2=.03$ )、協同プレー( $R^2=.05$ )、ストレス対処( $R^2=.05$ )、体力・身体活動( $R^2=.12$ )、批判2客観性( $R^2=.30$ )、批判2証拠の重視( $R^2=.28$ )、批判2探究心( $R^2=.52$ )、批判2論理的思考への自覚( $R^2=.34$ )を示した。**【結論】**大学体育授業を受講することによる学習者の批判的思考態度は、直接および間接的に正負のパスが確認されたが、主観的恩恵評価は総合的に高まる可能性が示唆された。

**キーワード:** 大学生, 体育実技, 共分散構造分析

●発表抄録

## 特別支援学校と連携したダンスの指導実践に関する事例研究:

小学校教員養成課程の体育実技に着目して

常行泰子<sup>1</sup>, 坂井香代<sup>2</sup>

<sup>1</sup>神戸市外国語大学外国語学部, <sup>2</sup>高知大学教育学部附属特別支援学校

**【背景と目的】**インクルーシブ教育は、障害の有無に関わらず人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の共生社会(文部科学省, 2012)を目指している。しかしながら、障害を持つ子どもの教育に携わる教員自身については、現在特別支援に直接的に関わる一部の教員を除いて、障害に関する知識・理解、さらに実践的な教育活動の経験が十分とは言えない現状がある。大学改革を踏まえた教育の質保証には、障害のある子どもと障害のない子ども、さらに教職を志望する学生の教育研究を各関連機関が連携・協働して推進することが望ましい。本研究では、知的障害のある子どもを対象としたチアダンス指導に関して分析を行い、小学校教員を志望する学生の指導実践について検証することを目的とした。**【方法】**Creswell(2003)が提唱するミックス法(mixed methods)を採用し、質的データを収集、トライアングレーションを実施した。**【結果と考察】**学生・生徒間において、指導における「ノンバーバルコミュニケーション」の重要性が示唆され、子どもとの信頼関係やラポール形成に触れる言説がいくつか示された。ダンス指導において、既に学習した他の教科と共通する横断的な学習経験が生かされていることが明らかになった。特別支援学校による評価からは、一定の教育成果が示されたと同時に、指導と事前準備、さらに雰囲気づくりに関する今後の課題が提示された。**【結論】**共生社会形成のためのインクルーシブ教育は、教科横断的な学習だけでなく、障害のある子どもと障害のない子ども、そして教員を目指す学生や教員の組織としての効果が期待できる。

**キーワード:** インクルーシブ教育, 知的障害, 健康支援, ヘルシーエイジング